未来の図書館 研究所

NEWS LETTER

No.15
2024.4.23

Contents

■ 所長 就任のご挨拶
■ 研究所 TOPICS
■ 電子書籍コレクション構築のイチシアティブ／戸田 あきら（Library Compass 第 11 回）
■ 図書館員の未来とは ― ワークショップから見える可能性 ―／長澤 麻理

就任のご挨拶

所長 戸田 あきら

この度、株式会社未来の図書館研究所代表取締役所長に就任いたしました。図書館が社会の中でより一層大きな役割を果たすことが求められているこの状況において、研究所運営のかじ取りを担う重責に身の引き締まる思いであります。何とぞよろしくお願い申し上げます。

ウクライナの戦争はもう三年目となりました。さらに、昨年からガザで新たな戦争がはじまり悲惨な状況が連日のように報道されています。対立、分断という言葉が世相を表すキーワードになって数年になりますが、ますます状況は悪くなっているようです。ウクライナ、ガザでの戦争をその最悪の事象としつつ、それだけでなく政治、社会、文化のあらゆるところで敵対的な刺々しい言葉が行き交い、対立と分断が露わになっています。

人は、もとより主観的な存在であり、おかれた立場、有している属性、育ったバックグラウンド等によりそれぞれ固有の認識や世界観を持って生きています。当然、知っていることや染み込んでいる常識は人によって違い、物事についての認識や意見も異なるでしょう。しかし、ほかの人と交わり、経験や知識を交流し、それぞれの認識や思考の枠を広げていけば、より幅広い知識を共有でき、無用な諍いを避け、逆に、新しい関係を生み出すことができるはずです。そもそも、教育や人間の成長とはそういうものであり、そのためのものだったのではないでしょうか。

このような状況を見るにつけ、図書館は、その役割を果たさなければならない、と強く思います。図書館は、過去及び現在の事実を収集・蓄積し、あらゆる情報への窓口となり、また、さまざまな人の見方、意見、感情に触れ、人や社会、世界について学ぶことができる機関です。世界の何万という図書館がその役割を果たせば、この時代のいやな流れを変える一助になれる、と私は信じています。

皆さまのお力をお借りして、これからの図書館を考え、図書館が地域、社会の中でより大きな役割を果たしていけるようお手伝いをさせていただきたいと願っております。今まで以上に頼りにしていただける研究所をめざし尽力して参りますので、一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

研究所 TOPICS

■ 『電子図書館・電子書籍サービス調査報告 2023』に研究理事 磯部が「デジとしょ信州」を担当執筆

一般社団法人電子出版制作・流通協議会監修『電子図書館・電子書籍サービス調査報告 2023』（2024 年 1 月 19 日刊行）に，研究理事の磯部ゆき江が「『デジとしょ信州』：長野県民はだれでもいつでもどこからでも」を担当執筆しました。

■ 『カレントアウェアネス』に理事長 永田が「CA2056 – 『ユネスコ公共図書館宣言 2022』」を寄稿

国立国会図書館『カレントアウェアネス』No.359（2024 年 3 月 20 日発行）に，理事長の永田治樹が「『ユネスコ公共図書館宣言 2022』：2022 年版に至る歩みとその活用」を寄稿しました。 ▶ https://current.ndl.go.jp/ca2056

■ 「第 3 次世田谷区立図書館ビジョン」が公表されました

2023 年度に当研究所が策定支援業務を受託しました「第 3 次世田谷区立図書館ビジョン」が，世田谷区立図書館ホームページに公表されました。▶ https://libweb.city.setagaya.tokyo.jp/info?1&pid=9277

■ 「江戸川区立図書館基本計画」が公表されました

2023 年度に当研究所が策定支援業務を受託しました「江戸川区立図書館基本計画」が，江戸川区公式ホームページに公表されました。▶ https://www.city.edogawa.tokyo.jp/e026/kuseijoho/keikaku/toshokan/index.html

■ 未来の図書館 研究所 NEWS LETTER を Web サイトに公開

本 NEWS LETTER をより多くの方にご覧いただけるよう，当研究所 Web サイトに電子版を公開することにいたしました。今後バックナンバーも順次公開していきます。 下記 URL または右記 QR コードからご覧ください。 ▶ https://www.miraitosyokan.jp/future_lib/news_letter/

■ 岡山県立図書館「令和6年度第 1 回図書館職員等研修講座（館長講座）」の講師を所長 戸田が担当

2024 年 4 月 24 日に岡山県立図書館で，県内公共図書館長及び管理的立場にある職員等（図書館未設置自治体を含む）を主な対象に，所長の戸田あきらが「図書館の経営と評価ー地域社会の中で頼りになる存在へー」をテーマに講演します。

■ 書籍『図書館と知識社会（未来の図書館 研究所 調査・研究レポート2023）』を 5 月末に発行予定

2024 年 5 月に，今号も引き続き書籍として樹村房より発売します。当研究所主催シンポジウム「図書館と知識社会」記録のほか，豊田恭子氏による講演「時代に対応する図書館を作る」記録，大串夏身氏の「コレクションづくりに関する一考察」，磯部ゆき江の「広域連携による電子図書館」，永田治樹の「知識社会と公共図書館：『IFLA-UNESCO 公共図書館宣言 2022』が投じた課題」の四つのレポートを掲載。知識社会における図書館の役割を考える論考をとりまとめました。

電子書籍コレクション構築のイチシアティブ
―カリフォルニア州の ENKI プロジェクト

戸田 あきら

◆電子書籍サービスの現状と日米の違い

コロナ禍の中で数少ないよかったことの一つは，公共図書館への電子書籍の導入が進んだことだろう。『電子図書館・電子書籍サービス調査報告 2023』[1]（以下「電流協調査」という。）によれば，電子図書館サービス（電子書籍サービス）導入自治体は，2023 年 10 月 1 日現在 520 自治体となった。今や，約 3 割の自治体では人々に電子書籍が提供されている。2007 年に千代田区立図書館が日本で初めて電子書籍サービスを導入して以来，遅々として進まず，2019 年においても全国 90 の自治体にしか導入されていなかった状況からみると大きな変化である。この数年間は，日本の公共図書館の電子書籍サービスの幕開けの時期といわれるようになるかもしれない。

しかし，電子書籍の利用はそう多いとはいえない。電流協調査によると，電子書籍の利用は，5 万点以上の貸出・閲覧を行っている図書館が 10.6%，1 万点以上 5 万点未満が 37.2%，1 万点未満が 52.2%（2022 年度）と，約 9 割が年間 1 万点未満の利用である。多くの導入図書館からは「予想したよりも利用が少ない」との感想が寄せられている。

一方，米国の公共図書館では電子書籍のコレクション数と利用の双方とも，日本よりはるかに多い。表 1 は，博物館・図書館情報サービス機構（IMLS）が実施した 2021 年度全米の公共図書館調査 [2] における電子資料関連の所蔵及びサービスの実績である。調査対象は，全米の 9207 館の公共図書館システム（図書館運営組織の単位）とあり，つまり，これによると，米国では，すでに概ね 9 割の公共図書館が電子資料・電子書籍を取り入れ，コレクションの数においては，今や印刷資料を上回るに至っている。利用においても，物理資料のほぼ半分を占める。

表 1 米国公共図書館の印刷/物理資料と電子書籍/資料の状況

区分		実績館数*	点数**	1 図書館システム当たり点数
コレクション数	印刷資料	9,183	661,919,615	72,081
	電子書籍***	8,367	1,046,687,266	125,097
利用数	物理資料	9,123	1,091,207,649	119,611
	電子資料****	8,324	464,088,295	55,753

* 実績館数は，それぞれの設問に対して 1 以上の実績を報告した図書館システムの数
** 点数は，全米の公共図書館システムから報告された実績数の合計
*** 電子書籍（コレクション数）には，自館で電子化したもの，所蔵だけでなく使用ライセンスを有するものを含む。タイトル数ではなく同時利用可能な重複を含んだ数
**** 電子資料の利用数には，電子書籍の他，ダウンロード可能なオーディオ資料，ダウンロード可能なビデオ資料の利用を含む

問題は，規模だけではない。このコレクションに人々が読みたい本，求めている本が数多く含まれていることだ。表 2 は，ニューヨークタイムズの“The 10 best books of 2023”のフィクション，ノンフィクション部門のそれぞれ上位 2 点の，ロサンゼルス公共図書館及びもう少し規模の小さいデンバー公共図書館の電子書籍の所蔵状況である [3]。

表 2 ニューヨーク・タイムズベストブック 2023 の電子書籍所蔵状況

Category	*Title* & Author	ロサンゼルス	デンバー
fiction	*The Bee Sting*, by Paul Murray	249	113
	Chain-Gang All-Stars, by Nana Kwame Adjei- Brenyah	96	53
non fiction	*The Best Minds*, by Jonathan Rosen	65	30
	Bottoms Up and the Devil Laughs, by Kerry Howley	29	11

「ロサンゼルス」及び「デンバー」欄に表示されている数字は，それぞれの図書館の当該電子書籍の所蔵数（同時利用可能数）である。いずれも相当量の所蔵を確保しており，紙の書籍風の言い方をすれば，小説部門の第 1 位の”*The Bee Sting*”について，ロサンゼルス公共図書館は 249 冊，デンバー公共図書館は 113 冊の複本を有しているということになる。ほかの 3 点についてもいずれの図書館も相当数の当該資料の電子書籍を所蔵している。ここではこれ以上表示しないが，ニューヨークタイムズの 2023 年のベストブック 10 点については，両図書館ともすべて所蔵，それもかなりの複本を所蔵している。

もう少し，この種の話を続けよう。東野圭吾は海外においても人気作家で，数多くの著作が英語を中心に翻訳され販売されている。ロサンゼルス公共図書館の OPAC で「Keigo Higashino」を検索するとかなりの数の東野圭吾作品の英語版がヒットする。もちろん電子書籍も所蔵されており，調べた結果，ロサンゼルス公共図書館には，12 タイトルの東野圭吾の電子書籍があるようだ。

ところが，日本の公共図書館の電子書籍サービスで「東野圭吾」を検索してもヒットしない。すべての図書館を調べたわけではないので断定的には言えないが，日本の図書館の電子書籍サービスでは東野圭吾の本は（ほとんど，あるいはまったく）提供されていないのである [4]。この日米の違いはどこからきているのだろうか。いや，より建設的な問いを建てるとするならば，米国の公共図書館は，どのようにしてこのような電子書籍のコレクションを構築してきたのだろうか。

◆ENKI プロジェクト

2015 年に ALA（American Library Association）から発行された『図書館コンソーシアム：協働と持続可能性に向けたモデル』[5] に，米国の公共図書館において電子書籍の所蔵及び利用が増加した理由の一つと考えられる事例が紹介されている。それは，約 200 の公共図書館，大学図書館，学校図書館が加入するカリフォルニア州の図書館コンソーシアムである Califa の ENKI[6] プロジェクトである。

Califa は，発足当初の 2004 年から 2008 年まで電子書籍サービスに関し OverDrive 社と契約していたが，2008 年にその契約を更新できなくなり，その結果，それまで構築してきた電

子書籍コレクションを継続できなくなるという事態に直面した。その経験から，電子書籍コレクションを自分たちで管理できないシステムではなく，電子書籍サービス提供業者（以下「ベンダー」という。）の意向や動向にかかわらず自館でコレクションを構築・維持できる，自分たち自身の電子書籍プラットフォームを追求することにしたのである。出版社や技術系会社と話し合い，メンバー図書館，他の機関，出版社，技術者の協力を得て開発を進めたという。

図書館が電子書籍プラットフォームを構築するには，次の四つの要素

① ファイルを格納するスペース
② デジタル著作権管理（Digital Rights Management: DRM）の方法
③ 利用者が電子書籍を探す方法
④ 電子書籍の貸出管理の方法

が必要である。それぞれについて，次のように選択・対応した。

① ファイル収納スペース・ベンダーが提供するクラウドを活用
② DRM システム及び④貸出管理・Adobe Content Server（ACS）を利用
③ 電子書籍を探す方法・ディスカバリーサービス・モジュール（インターネット上のさまざまなサービスを統合的に探せるようにするシステム）である VuFind+（コロラド州のマーモット図書館ネットワーク（Marmot Library Network）で開発されたもの）を利用

このように，自前で電子書籍サービスのプラットフォームを開発した事例はほかにもある。ダグラス郡モデル（Douglas County Model）と呼ばれる方式で，その名のとおりコロラド州ダグラス郡の図書館が最初に開発したものである [7]。その後，カリフォルニア州，カンザス州，テキサス州，マサチューセッツ州の図書館などにも広がっている。

この方式であれば，ベンダーの動向によって構築した電子書籍コレクションを失う危険を避け，さらに電子書籍の仕入れに関しベンダーを通さず直接出版社との取引が可能である。ベンダーが用意し提供する資料だけでなく出版されている電子書籍のすべてから（出版社が図書館に販売する意向を持っていれば）選択・購入できるのだ。Califa の事例では，その後，出版社と密接な関係を築き，直接電子書籍を購入していることも紹介されている。

◆コレクション構成のイニシアティブ

しかし，この方法，ベンダーから独立した電子書籍プラットフォームというやり方がいつも図書館にとってベストの方法であり，唯一図書館が進むべき方向だ，というわけでもないようだ。たとえば Califa メンバー館であるロサンゼルス公共図書館の Web ページを見ると，電子資料の利用サイトには，OverDrive 社の電子図書館アプリ Libby が表示されており [8]，電子書籍コンテンツの多くは引き続きベンダー大手の OverDrive 社から提供されている。

ベンダーは，多くの出版社と契約し大量の電子書籍コンテンツを確保している。そのため図書館が一定規模の電子書籍を用意する場合，特に人気の高い読み物を揃えたい場合は，ベンダーからコンテンツを導入する方が，間違いなく便利であり効率的である。一定規模の電子書籍をパッケージ化し比較的安価で期間提供する，いわゆるサブスクリプション契約は，ベンダーならではの電子書籍提供方法であり，限られた予算で最大限のコレクションを構築するには大変よい方法である。そのことは否定のしようがない。

重要なことは，図書館の資料選択がベンダーの提供範囲に限定されないことである。これは，図書館のコレクション構成は誰に対して責任を負うべきものか，そして誰がコレクション構築のイニシアティブを取るのか，という問題につながる。図書館に入れたい資料がベンダー（取次）から提供されない場合，出版社と直接交渉して受け入れ利用者に提供する，これは印刷資料と同様に，電子書籍においても図書館が利用者のニーズに合ったコレクションを構築するために必要な条件ではないか？

それともう一つ，ここで強調すべきなのは，図書館コンソーシアムの購買力（buying power）であろう。電子書籍は，紙の本と違って販売時点以降も厳重な著作権管理が可能であり，そのため出版社やベンダーは，図書館への提供（つまりは図書館から利用者への提供）に対して高いハードルを課したり，抑制的になったりしがちである。しかし，米国の図書館界は，広範な図書館利用者の要求を背景に，また，図書館の主体的な資料選択の可能性を開発・確保しつつ，コンソーシアムという集団の力で交渉を続けてきた。そして，先ほど挙げたようなベストセラーの電子書籍もベンダーから大量に提供されるような状況を生み出してきたのだ。

◆日本の電子書籍サービス

翻って日本の図書館の状況はどうか。前述の電流協調査では，図書館の電子書籍コンテンツに対して厳しい意見が寄せられている。「電子書籍サービスで提供されるコンテンツに課題がある」と答えた館が 71.4%にのぼり，うち 80%を超える図書館が「提供されているコンテンツのタイトル数が少ない」「新刊のコンテンツが提供されにくい」「ベストセラーが電子書籍貸し出し向けに提供されていない」と回答している。現状では，図書館が利用者に提供できるコンテンツの量及び質は十分ではない，と多くの図書館も感じている。

『図書館コンソーシアム』の第 2 章「コンソーシアムの概況」の中で，図書館コンソーシアムの当面する課題として五つのテーマが掲げられているが，その一つは「図書利用者を満足させられる人気のある電子図書館コンテンツのライセンスを得ること」である [9]。日本の図書館も電子図書館サービスの幕開けの時期を過ぎた現段階において，どのように利用者の要求に応える電子書籍コレクションを構築していくか，に取り組んでいく必要があるのではないだろうか。

【注・参考文献】

1. 植村八潮（ほか）編著，一般社団法人電子出版制作・流通協議会監修．電子図書館・電子書籍サービス調査報告 2023：誰もが利用できる読書環境をめざして．樹村房，2024，197p.
2. Institute of the Museum and Library Service. Public Library Survey FY2021. https://www.imls.gov/research-evaluation/data-collection/public-libraries-survey（参照 2024-03-10）
3. それぞれの図書館 Web OPAC で検索。いずれも，2024-3-12 参照。
   ・ロサンゼルス公共図書館．https://www.lapl.org/books-emedia
   ・デンバー公共図書館．https://catalog.denverlibrary.org/
4. 日本語版はヒットしないが，東野圭吾の著作の英語版はいくつかの図書館の電子書籍サービスで提供されている。例えば，江戸川区立図書館電子図書サービス。https://edogawa-library-e-book-service.overdrive.com/（参照 2024-3-21）
5. Horton, Valerie and Pronevitz, Greg (eds.). Library consortia: models for collaboration and sustainability. American Library Association, 2015, 216p.
6. ENKI は，古代シュメールの知性，魔法等をつかさどる神の名前からきている。
7. 林豊．米国図書館界で注目，電子書籍の「ダグラス郡モデル」とは?．カレントアウェアネス．2012，(227)，E1363. https://current.ndl.go.jp/e1363（参照 2024-3-21）
8. Los Angeles Public Library. E-Media and Digital Content. https://www.lapl.org/books-emedia/e-media（参照 2024-3-10）
9. 前掲 5，p.22.

図書館員の未来とは

― ワークショップから見える可能性 ―

長澤（ながさわ） 麻理（まり）（富士川町立図書館）

あれは SNS の広告だったと思う。「ワークショップ 図書館員の未来準備」の文字が目に飛び込んできた。当館がオープンして 1 か月ほどしたタイミングである。

私の勤務する富士川町立図書館は 2023 年 7 月 15 日に新築オープンした。通常の移転新築オープンとは異なる環境にあった。同年 2 月末をもって閉館した富士川町民図書館はいわゆる「公民館図書室」である。新図書館は「公立図書館」となり，規模もサービスも拡充した。この規模の変更に伴い条例等の整備も必須であった。当館も現在の図書館建設の主流である複合施設の一施設だ。施設名は富士川地方合同庁舎。他の入居官署は，国の出先機関（税務署・法務局・労働基準監督署・ハローワーク・検察庁）である。合同庁舎の定例会は，各官署，建築担当の国交省と，業者とで最低月に 1 回，一年を通して開催。館内建築部分（書架，カウンター，内装，電気設備等）は，定例会とは別途実施し，国交省，建設会社，設計会社とリアル，オンライン，ハイブリッドで頻繁に行った。システム導入はプロポーザル方式。コンサルタントは入らず，仕様や機能要件もすべて職員が行い，8 月公告，10 月に決定した。23 年 3 月末に建物が引き渡され，その後，図書館システム関連の電気，ネットワーク工事，什器の入札，搬入，そして引っ越しと目まぐるしく日々が過ぎていった。

このような，タイトなスケジュールかつ，イレギュラーな図書館建設過程であり，県内研修にすら行く機会はほぼなかった。そんな私に飛び込んできた研修。しかも半数が休館日であること，オンラインもリアルも可能であること，10 月となれば当館も少しは落ち着いて休暇申請できるであろうと申し込んだ。

領域は，三つに分かれており，会場や講師の都合があるからだと思うが，領域順とは異なっていたので私には頭の切り替えが少々大変であった。ここで簡単な感想を記すこととする。

■領域① 図書館情報システム

星野雅英氏の講義では，導入図書館システム在りきで数値を読み取っていることを認識し，川嶋斉氏には，現状の Web サイトをより効果的に活用する工夫の余地があることに気づかされた。その中で openBD API（バージョン 1）の提供終了を知り，大きな驚きがあった。中野良一氏の講義では，今後の生成 AI の可能性と今後の展開とわれわれの関わり方に刺激を受けた。

■領域② 図書館の役割 1「図書館とコミュニティ」

長野源世氏，篠原智子氏からは，当館より 1 年先に開館した三条市立図書館と NPO 法人えんがわの実践事例を多数聞くことができた。自治体規模も運営形態も異なるが，そこには「にぎわいの創出」という富士川地方合同庁舎のシビックコア計画と通ずるものがあり，今後の参考としたい。豊田恭子氏の講義では，図書館サービス拡充への努力の必要性を感じた。刺激的だったのは「図書館の価値を伝えるアメリカのアドボカシー活動」である。図書館が何かしら介在した成功例を，感情的な仕掛けと統計データをもって伝える。日本人には不得意とされることだが，このストーリー（具体的事例）のインパクトによる説得は，今後の図書館の可能性を広げうるものだ。大串夏身氏からは，全国の図書館の取組み事例が提供された。図書館がまちづくりにどのような役割を果たし，住民がよりよい人生を歩む手助けが可能か，自身に問い直す機会となった。

■領域③ 図書館の役割 2（図書館と学び）

村山正子氏の講義では，図書館とは切っても切れない関係の新聞の情報価値について再確認した。「新聞を使って図書館で何ができるか」について話し合うグループワークでは，講義中にも話題になった「3.11 の新聞」について発言をした。当時学校司書であった私は，空欄となり「放送内容未定」と書かれた 2011 年 3 月 12 日のテレビ欄を保存した。児童にとって身近なテレビ欄に起きた異変，これほどわかりやすいものはなかったからである。テレビ欄も一情報だと共有できたことは，発言者としてもうれしく思う。渡辺ゆうか氏のワークショップでの3D モデリングは，このような機会がなければトライできない。今後生成 AI を含め，さまざまなことに挑戦しやすい環境になっていく。図書館がどのように効果的活用をするか，その一端を体験できた。伊藤明美氏の就学前施設の読書環境に関する講義は，実に身につまされる内容であった。開館間もない当館では未実施のサービスはたくさんある。もちろん段階を経てスタートさせるわけだが，ただの支援ではなく，連携を図る。本町は，新図書館開館にあわせ「子どもの読書活動推進計画」を策定した。町全体で取り組むこの計画を推進するためにも，読書環境整備に注力したいと気持ちを新たにした。

印象的だった豊田氏のストーリー作成のワークショップ。ワークショップ当日は，開館間もなく自館でのエピソードが見つからず架空のストーリーを記載した。開館から半年以上が経ち，新たに当館で起こったストーリーを記そう。

〈町内在住の S さん。お祖父さまは昭和初期に活躍した彫刻家である。お祖父さまの初の企画展が他県で開催され図録を当館に寄贈してくださった。その際に「祖父の業績をもっと知ってほしいが，なかなか興味を持つ方が周りにいない」と嘆いていらした。図録の中に南京豆細工があり，この作品は S さんご自身が保管しているとのこと。福々しい作品なので新年に図書館内で 1 か月間展示してはと提案した。新春の寿ぐ愛らしい作品は，来館者を笑顔にし，地元紙にも取り上げられた。S さんは，住民の方に披露できたことを喜び，多くの声が届いたそうだ。来館者数は 12 月と 1 月を比較し，15%増となり，好評につき会期が延長された。当館は地元の方の文化芸術を応援し，発信する場でもあります〉

▲ 新春南京豆細工展示の様子

「図書館は成長する有機体である」とランガナタンは説いた。オープンがゴールではない，スタートなのだ。トライ&エラーをしていくしかない。図書館が成長するには，われわれ図書館員が成長しなければならない。ハードは限られている。ソフトで補えることがあれば変えてゆく。それができるのは図書館には人がいるからだ。だからこそ学び続ける。図書館の未来は明るい。ユーザーの声を聴き，視野を広げ，われわれが努力を怠らなければ。

* 第 7 回ワークショップ「図書館員の未来準備」の詳細は以下 URL をご覧ください
https://www.miraitosyokan.jp/future_lib/ws/202310/workshop2023.pdf

編集・発行：株式会社 未来の図書館 研究所 〒113-0033 東京都文京区本郷 4-9-25 2階 URL: https://www.miraitosyokan.jp
info@miraitosyokan.jp ☎ 03-6673-7287 FAX 03-6772-4395 https://www.facebook.com/miraitosyokan/
図書館づくりのご相談，原稿執筆，講師依頼等，お気軽にご連絡ください。本 NEWS LETTER へのご寄稿もお待ちしております。